

保育のための“遊び”研究考()

「草履隠し」について

大 森 隆 子

序

履物に纏わる遊びの思い出といえば、その昔、公園のブランコを漕ぎながら靴飛ばしをしたこと、大人の靴を拝借してごっこ遊びに興じたこと、そしてなぜか一日の遊びの仕舞い頃になると、決まったように靴を放り上げては明日の天気占いに夢中になったこと等々が懐かしく蘇ってくる。

中でもルールのある仲間遊びとして印象深いのが、今回考察対象として取り上げた「草履（下駄）隠し」である。この遊びは、まず全員が履物の片方を差し出して一列に並べ、その上を親が唱句に合わせて順番に指差してゆく。歌の終に当たった履物の持ち主は、その瞬間に鬼と化し、履物を隠す<隠し鬼>へと移行する。こういった決まりごとのもとに繰り返し親しんだように思う。

今でも、並べられた不揃いの履物の列や鬼に当たるか否かと胸を弾ませたことなど、遊びの点景や心象についてはくっきりと思い起こすことができるのだが、どういうわけか鬼決めの際に共に唱和した唱え言葉の方はさっぱり思い出せない。格別の意味はない何かしら不可解な詞句の連なりであったような気はするのだが、言葉の断片すらも取り戻せないのである。一体どういった詞句であったろう。手が加えられて、今に伝わっているのだろうか。あるいはそのままの形でどこかに残されているのだろうか。そもそもこの遊びは現在どのような状態にあるのだろうか。

遊びに関わる懐かしい気持ちといくつかの疑問とを抱きつつ、身近にいる本校の学生達（昭和50年～昭和51年生まれ）に幼い頃の体験を尋ねてみた。その結果、この遊びを知っていた者は103人中15人で、そのうち、鬼決め歌詞を覚えていた者は3人であった。覚えていた学生に、忠実に再現してもらったのが次に示す3例である。

草履隠し（A）

じょじょじょじょかくし
草履のおばさんが草履で鼻かんで
うんとこどっこい・・・（以下不詳）（名古屋市）

草履隠し（B）

じょじょじょりかくし
じょりやのばあが草履で鼻かんで
うんとこどっこいほうれんそう
牛買おか 馬買おか 馬の代わりに牛買った（名古屋市）

くつ隠し

くつかくし しゅう(ちゅう)れんぼう
 橋の下のねずみが草履くわえてチュッチュックチュー
 チュッチュクまんじゅうは誰が食た
 誰も食わへん わしが食た
 表の看板三味線屋(三重県亀山市)

再現された3つの遊び歌をこうして併記してみると、まず異なる2系統の詞句に分かれることに気づく。これは採集地の違いによるものだろうか。しかし又、詞句の違いを超えて、遊びの唱句としての共通性も大いに感じられる。いずれも文意は全くナンセンスで、古色蒼然とした語彙の配下にあるが、行間に溢れるユーモア精神は印象深く、とりわけ「草履隠し(A)(B)」の表現は脱帽ものである。

さてここで再び起点に帰り、筆者の唱句例と思しいものを小泉氏の調査報告(東京、昭和36年度実施)の中に探してみた。それが次の2例である。

下駄かくし(A)

下駄かくしつれんぼ 橋の下のねずみが草履をくわえて チュッチュクチュ
 チュッチュクまんじゅうはだれが食うた
 だれも食わないわしが食うた
 橋の下の3軒目

下駄かくし(B)

下駄かくしまないた まないたの上でけんかが始った¹⁾

実際こうした歌詞例を目の前にしても、しかと記憶を手繰らせることはできないが、調査の時期や地域的条件から考えて、おそらくこれかもしくはこれに類した詞句であったらと思う。そうと仮定すれば、ここで改めて不思議な事象に心が引かれる。すなわち、筆者が歌唱していたこの「下駄かくし(A)」の詞句と、今回学生の記憶から甦らせた「くつ隠し」の詞句とが時空を超えて重なり合うということである。

遊びの詞句がもたらすこうした興味深い符合にも思いを遣りつつ、本稿では、伝承遊び「草履隠し」について、その源泉を探るとともに今日に至る伝承の過程を追ってみたい(I)。次に、近年まで各地に伝えられてきた多様な遊び型や詞句例を集約し(II)、それらを基にこの遊びについて考察を加えたい(III)。そうした糧を通して、子どもの遊び全般について何らかの提言が得られればと思う(結び)。

1) 小泉文夫編『わらべうたの研究 楽譜編』〔わらべうたの研究〕刊行会、1982、p.226.

「草履隠し」の発祥と展開

伝承歌謡の研究者であった志田延義は、その著『続日本歌謡圏史』の中で、「草履隠し」の歌と「徒然草野槌所載巷歌」との関係に関心を寄せて考察をなさっておられる。結論からいえば、このわらべ歌は「これら二首の巷歌を子供の世界に摂取して伝承したものである²⁾」と相互の密接な関係を認められた。元歌として考えられたその2首とその意の解釈も含めて、氏の言葉を借りながら紹介しておきたい。

『国文論纂』所収、目黒和三郎の「第五十俗謡巷歌諷諷諷刺の意
になりしもの」には、「徒然草野槌に、頼朝の時、俗間に謡へりとして、左の二ツのものをいませり、」¹⁾といて、

一りけんちやう、二けんちやう、三里けんちやう、四けんちやう、しこのはこの上には、糸もはもおとり、十万鶴、豆なかえたよ、黒虫は源太よ、あめ牛めくらが、杖ついでとほるところ、それはそこへつんのけ、
橋の下の菖蒲は、折れどもをられず、かれどもかられず、伊東殿、土肥殿、土肥がむすめ、梶原源八、介殿、のけ太郎殿、

を掲げ、解を試みて、

一りけんちやう云々、こは一間町二間町などといふ義にて、鎌倉の町割をいふなり、
(中略)蒲の御曹子の、御連枝なれども、弱きにも、強きにも、何の用にたち給はぬを、
菖蒲のをれどもをられず、かれどもかられずといふなり、³⁾

とある。すなわち元歌の2首とは、「一りけんちやう、二けんちやう・・・」と「橋の下の菖蒲・・・」をいう。

現在、伝承遊び研究の第一人者であられる梶原氏も今日に伝わる草履隠し歌の代表例を数種あげ、それらはいずれも「鎌倉時代の俗謡から派生した<ぞうりかくし>の歌です⁴⁾」と、『徒然草野槌』の記述を引用して志田氏と同様の説を発表されている。本章では、こうした説を念頭におきつつ「草履隠し」の遊び方や詞句の変遷について筆者なりに探索を試みたい。

1. 遊び方について

そもそもこの遊びが具体的な姿を我々の前に初めて見せるのは、「絵本西川東童」(1746)中の「ぞうりかくし」の絵図⁵⁾を通してである。男児4人が片方ずつ出した草履4つは一列・等間隔に並べられ、座して指さして数えてゆく親とそれを佇立しながらじっと見入る子らがいる。言うまでもなくこの場面は、「草履隠し」の前段で取り行われる鬼定めを描写したものである。一体何故隠し鬼遊びの説明

2) 志田延義『続日本歌謡圏史』至文堂、1968、p.219.

3) 同上、pp.218-219.

4) 尾原昭夫編著『日本のわらべ歌戸外遊戯歌編』社会思想社、1975、p.114

5) 西川祐信画『絵本西川東童』1746年(尾原昭夫『近世童謡童遊集』柳原書店、1993所収)。



図1 ざうりかくし
(『絵本西川東童』より)

ところでどうしたことが、それから一時、江戸の児戯を扱った文献からこの遊びは姿を隠してしまう。先程の書より30年余り後に出され、その頃の児戯を網羅したといわれる『童謡集』(1820)にも見当たらないのである。一方、草履を用いた鬼定めの方は、江戸の子どもたちの間で順次継承されており、その過程で遊び方にも幾分かの変化がみられる。例えば、『童謡集』の場合は、



図2 ざうりきんぢょきんぢょ
(『幼稚遊昔雛形』より)

図に、ことさらこの場面が取り上げられたのだろうか。そのまま素直に受け止めれば、遊び「草履隠し」は草履をさしてゆく鬼定めと一体化していたということになる。

二番目にその姿が確かめられるのは、当時の川柳點付句の一つに、「朝のうち草履かくしを廊下でし」⁶⁾とよまれていることで、三番目が、四方赤良の狂文集『四方のあか』(1787)の児戯・童謡41種を詠み込んだ「児戯賦」の件に「草履かくしのはなをたづねて、たよりなきところにまよひ」⁷⁾と記されていることである。ただしこれらの資料からは、遊びに伴う鬼定めの方法までは判別不能である。

鬼定めのため各自片方の草履を出し、それを集めて投げ上げ、落ちた時上向きの物は持主に返す。他の物を同様に繰り返す、最後に残った者が鬼。二個だけ残った時はこの歌で交互に突いて行き、歌の終わりに当たった者が鬼となる⁸⁾

とある。すなわちこの場合は、初め、草履を空に投げて落ちた向きで選別し(投げ上げ型)、次に、これまでの数え型で鬼を決めるといふ併用型を示している。

少し年代が下がって、幕末時分の児戯集『幼稚遊昔雛形』(1844)には、「ざうりきんぢょきんぢょ」という名を冠した鬼決め(図2)が紹介されている。遊び方は、

6) 小林恵子編著『幼児のための集団遊び120』国立音楽大学, 1989, p.26.
7) 大田南畝『四方のあか』1787年(前掲『近世童謡童遊集』所収, p.43).
8) 釈行智『童謡集』1820年(同上, p.56).

みなみなの、かたがたづつならべたるぞうりを、あしでかんぢょうし、うたのとまりにあたった
ぞうりの子は、だんだんにぬけ、のこりし子がおにとなって、(下線、は筆者)⁹⁾

とあって、ここでは元の数え型に戻っている。ただし元の方式に比べ、下線とに窺えるような2点の変更が加えられている。この他、『守貞漫稿』(1853)においては「草履まき」¹⁰⁾という投げ上げ型鬼決めが、又、明治に入ってから『あづま流行時代子供うた』(1894)では数え型の鬼定め¹¹⁾がそれぞれに記録されている。

ところで、資料の上ではほぼ百年にわたって姿を消していた「草履隠し」が、再び江戸(東京)市中に姿を見せるのは、『日本児童遊戯集』(1901)における「下駄隠し」としてである。その場合の遊び方は、

一人の鬼、目を蔽い隠し居る間に、他の児童は各我が片足の履物を知れざるよう隠し置き、鬼をしてその所在を搜索せしむるなり、若し発見せらるるときは、その履物の所有主は鬼となるなり。鬼が履物を搜索する間、他の児童は片足にて飛び居るか、又は垣或いは家の羽目などに寄りかかり居り、左の如く句を唱え居るなり。

天に一つ、足もとに一つ、こう屋の曲りにまだ一つ。

又我が履物を隠せし場所の付近に鬼の徘徊し搜索することあるときは、児童は声高に呼んで曰く、おいらのお蔵に火がつきそうだ。¹²⁾

というもので、これは「草履隠し」遊びそのものである。こうしてみると、「草履隠し」から「下駄隠し」へと衣を替えつつ履物隠しの命は長らえられていたことが裏付けられる。

さてここでもう一度江戸時代に戻り、江戸以外の諸国にも視野を広げて検証を加えておきたいと思う。初めに京阪地区に視線を向ければ、まず目を引くのが『皇都午睡』(1804~1818)に記されている「橋の下の菖蒲」という童謡である。というのは、この歌の題名が「草履隠し」歌の原形の一つとして紹介された詞句と同じだからである。ところがこの童謡の全容は、

木杭隠し九年母、橋の下の菖蒲刈れども刈れぬ、たい殿同鯛の虫は軽業、味噌ちつくり酒ちつくり、
 呑でもお腹はたちやぬなや、(圈点は筆者)¹³⁾

となっていて、題名は同じでも歌詞そのものは、相当な転訛・改変がなされている。そもそもこれは、草履隠しの歌ではなく、木杭、すなわち木切れ隠しの歌である。この地域では、当時、この種の遊びが広く流布していたらしく、「浪華子供あそび名よせ大津絵」¹⁴⁾(1864)にもその名が記されている。この「木ぐい隠し」と「草履隠し」の関係については、『淡路草』(1825)において下線のように記述されている。

9) 万亭応賢著静斎英一画『幼稚遊昔雛形』(同上, p.80)。

10) 喜田川守貞『守貞漫稿』1853年(同上, p.304)。

11) 岡本昆石編『あづま流行時代子供うた』1894年(同上, p.332)。

12) 大田才次郎編『日本児童遊戯集』平凡社, 1968, pp.53-54。

13) 西沢一鳳『皇都午睡』1804~1818年(前掲『近世童謡遊集』所収, p.138)。

14) 一荷堂半水編『花袋』1864年(同上, p.141)。

丸く立ち並びて、各々草履を片足あてぬぎて前に置く時、一人左のうたを唱へ、拍子につれ足にてかの草履を踏みつつ、算へ廻りて、終りにあたる草履の主を鬼とし、さて草履を隠すには非ず。木の折れ、竹の端などを隠す品と定め、隠す所をもここよりかしこ迄と定め、鬼はかくの如く眼を塞ぎて寝る時、残る者相謀つてかの品を壁の隙間石の下などへ隠し、一同に最よと云ふと、鬼眼を開きて、かしこへ行き尋ね、得る時は又始めの如くかぞへて鬼を定む。尋ね得ぬ時は隠せし者より取出す。これを上ると云ふ。上る時はその者再び鬼を勤るなり。(下線、は筆者)¹⁵⁾

この遊び歌は、

草履隠し、せたまたたいにや、たくらたくらひにやまた、ふんぞくはないよ、ことばもいらいで、てんでがこのくいちたるい。¹⁶⁾

というちんぷんかんぷんのまるで呪文のような詞句である。この場合は、「草履隠し」という名のもとに、実は木や竹を隠す遊びが展開しているわけで、それも遊びの内なのであろう。下線にあるように、草履の並べ方が一列ではなく輪状という形態をとることもユニークである。

次に、目を北方へ移してみよう。江戸から遠く離れた北端の地陸奥にも「草履隠し」の記録が残されている。一つは『鄙廼一曲』(1809)という書で、そこには「草履かくし」¹⁷⁾の遊びがあったこと、同時にそれに付く鬼定め歌も紹介してある。二つは、「陸奥国白川領答書」(1818-)という文書で、詞句と遊び方についての報告が以下のようになされている。

ぞうりけんじょけんじょ、おてんじょ桜桜、ものよしこよし、一げしよ二げしよ、三げしよ、七方か^{しっぽ}は^{はっぼ}八方か、はりまのはやし、小池のちどり、松屋の花ひらいたか、つぼんだか、おなんさかさに、おてんぐるまに、おほらほらほとさ。

此歌の句切句切にかぞへ、ひとり残りしもの鬼と成て、草履を尋る遊び也。¹⁸⁾(下線は筆者)

このように、江戸市中からは姿を消していた「草履隠し」が、同時期、遠隔の地に足跡を残していたのである。

もう一件、尾張地方の童遊集にも目を向けておきたい。この地においては『熱田手毬歌』¹⁹⁾(1830-31)と『尾張童遊集』²⁰⁾(1831)の二著に、「草履隠し」の遊びがあったことが明記されているが、内容的には、前書は数え型の鬼定め、後書は投げ上げ型の鬼定めとなっていて、遊び方の点では一部違いをみせている。

2. 詞句について

前述したように、遊び「草履隠し」の存在が文献にて確認されるのは、1746年以降のことである。

15) 藤井彰民『淡路草』1825年(同上, pp.184-185)。

16) 同上。

17) 菅江真澄『鄙廼一曲』1809年(同上, p.151)。

18) 駒井乗邨編『陸奥白川領答書』1818年(同上, p.165)。

19) 高橋仙果『熱田手毬歌』1830-31年(同上)。

20) 小寺玉晃『尾張童遊集』1831年(同上)。

これに対し、遊びの詞句に絞っていえば、それより約半世紀前に上梓された『筆のかす』(1704)中の「橋の下の菖蒲」を、その原形とみておきたい。それは、

橋の下の菖蒲は誰が植えた菖蒲ぞ、じたい殿、たい殿、たいが娘梶原²¹⁾

という詞句例(1)で、鬼決めの際に歌われたものとある。

同様の詞句例(2)は、『牛馬門』(1755)に、

ダイドノ ダイドノ、タイガ娘八梶原、アメウジ盲ガ杖ヲ突テ通る処ヲ、去バヨツテ終ノケ、^{サラ}^{ツイ}22)

があり、又『拾推雑話』(1757)に一例(3)、

橋の下の菖蒲は刈れどもかられず、折るともおられず、御台どの 台どの、台が娘、梶原源八、すけどの、よいやうに頼ます。²³⁾

がある。さらに、『諺苑』(1797)には二例(4)(5)、

イチクタッチク タイノメ、タイガ女梶原、源八助六 ヲンノキャレ。

橋ノ下の菖蒲八、サイタカ サカヌカ、マダサキノロハヌ、メウメウ車が、ヒドロク マドロク、
^{サブロウジツ}三六²⁴⁾ (以上、下線及び波線は筆者)

が紹介されている。ところで、この5例((1)~(5))は遊びに付く詞句の変遷経過を窺い知る好例である。というのは(1)~(4)は「草履隠し」歌のルーツとみられる鎌倉時代の俗謡をそのままに残しているが(下線及び波線部)、(5)は唯一「橋ノ下の菖蒲八」を継承するも、他は全く異なる詞句から構成されている。

さて、この(4)から(5)への大転換は何によるものか。筆者はそれを、「橋の下の菖蒲」を受ける語にあるとみた。すなわち、(1)では、それは「誰が植えた菖蒲ぞ」であり、(3)では「刈れどもかられず」である。いずれも俗謡の調子を引き継ぐ趣があるが、(5)の場合は、それが「サイタカサカヌカ…」とあり、いかに子どもらしい語調に転じているのである。それが、以下「メウメウ車が、…」という新たな詞句の展開を導く主因を成しているように思われる。最大の距離感を呈示し合う(4)と(5)が、一つの書に同時記載されていることも興味深く、それゆえ一層、詞句の転換・変貌の分水嶺がこの辺りにあることを示唆しているように思えてならない。

ところで、これら鬼定め歌に伴う所作について調べてみると、全例が、専ら手を用いた動作に終始していた模様である。そこでそれ以降については、遊び「草履隠し」とのより密接な関係が想像される、草履を用いた鬼定め歌の方の的を絞って文献をあたってみた。その結果浮上したのが次の5例

21) 野間義学『筆のかす』1704年(同上, p.18).

22) 新井白蛾『牛馬門』1755年(同上, p.37).

23) 木崎惕窓『拾推雑話』1757年(同上, p.38).

24) 太田全斎『諺苑』1797年(同上, p.45).

a～eの詞句である。

a 「鬼わたし」(『童謡集』1820)

草履きんじょきんじょきんじょ、おじょんまじょんま、はしの下の菖蒲は、咲いたか咲かぬかまださかぬ、みやうみやう車を手にとて見たれば、しどろくもどろく十さぶろくよ。²⁵⁾

b 「ざうりけんじょ」(『嬉遊笑覧』1830)

ざうりけんじょけんじょ、おてんまでんま、橋の下の菖蒲はさいたかさかぬかまださきそろはぬ、めうめうぐるまを手にとて見たれば、しどろくまどろくじうさぶろくよ。²⁶⁾

c 「ぞうりきんぢょきんぢょ」(『幼稚遊昔雛形』1844)

ぞうりきんじょきんじょ おでんまでんま、はしのしたのしょうぶは さいたかさかぬかまださきそろはぬ めうめうぐるまを手にとて見たればしどろくまどろくじうさぶろくよ

しんまいかすのこ、ひやかしかすのこ、ひねならそつちへつんのふけまろ。²⁷⁾

d 「種々遊唄」(『あづま流行時代子供うた』1894)

草履きんじょ、きんじょ、おてんパてんバ、橋の下の菖蒲が咲いたか咲かぬか、まだ咲揃はぬ、妙妙車を手に採てみたらば、しどろくまどろく十三六、

雪隠の婆さんすつとんとん。²⁸⁾

e 「草履近所近所」(『日本児童遊戯集』1901)

草履近所きんじょ、おてんまでんま、橋の下の菖蒲は咲いたか咲かぬか、まだ咲揃わぬ、妙々車を手にとて見たらばしどろくまどろく、十三六よ、

一ぬけたアドンドコショ。²⁹⁾

(以上下線及び波線枠は筆者)

こうした特定地域(江戸)での長期にかかる口承の事例(a～e)から、いくつかの興味深い事実が明らかにされる。一つは、詞句の主部と覚ゆる「橋の下の菖蒲は、(中略)しどろくまどろく十三六」が、ほぼそのまま正しく伝えられたこと、二つは、何故かすべてが「草履きんじょ」という謎めいた詞句をもってスタートしていること、三つは、下線部の詞句の推移 <おじょんま> <おてんま> <おでんま> <おてんバ> <おてんま> の回遊模様である。四つは、波線で囲った詞句部分に見られるフレーズ単位の大膽な付加・削除、変換行為の実例である。

次いで、横への伝播事例についても考慮しておきたい。京阪地区から一例をあげれば、

木杭隠し九年母、橋の下の菖蒲刈れども刈れぬ、たい殿同鯛の虫は軽業、味噌ちつくり酒ちつくり、呑でもお腹はたちやなや。³⁰⁾

25) 前掲『童謡集』p.56.

26) 喜多村信節『嬉遊笑覧』1830年(前掲『近世童謡童遊集』所収、p.295).

27) 前掲『幼稚遊昔雛形』p.80.

28) 前掲『あづま流行時代子供うた』p.332.

29) 前掲『日本児童遊戯集』p.65.

30) 前掲『皇都午睡』p.138.

といもの。陸奥からは、

ざうりきじよばんに、たんたんお茶の子、ぢんからぼうに、ぢいとうバァとん、粟粥、稗粥、たが鬼、かが鬼、われこそ鬼の子たれか³¹⁾

という例、水戸には、

草履きんなんにたつミどのが御弟子ハのう来てまた来てすいさんすごろくぬけめのものよ³²⁾

がある。熱田には、

ぞうりかくししょうねん坊 じょうりやのおばばがぞうりで鼻かんで、ふんつくつんのつんよ。木まめ丹豆すたたんたんよ、こうやの屋根でからすがいちは、などゆてなくよ、かアかとなアくうよ、³³⁾ (下線は筆者)

との例がある。

こうしてあげてみると、冒頭の詞句を始めとして詞句全体の共通性は縦の伝承に比べて薄弱で、自由奔放な展開が顕著である。

「草履隠し」例の集約

明治期後半から昭和期にかけて日本各地で実際に遊ばれていた「草履隠し」の例を、『日本わらべ歌全集』全27巻³⁴⁾に求めてあつたところ、全編を通じて119例が抽出された。本章においては、それらを考察対象として取り上げ、分布状況、詞句、遊び方の面からまとめてみた。

1. 分布について

119の事例は、北海道、埼玉、栃木、奈良、佐賀、沖縄の5道県を除く41都府県に広く記録されていた。具体的な分布状況は表1のとおりである。

表1 分布状況

地区	都府県	例数	地区	都府県	例数	地区	都府県	例数	地区	都府県	例数
東北 (12)	青森	2	北陸 (11)	富山	2	関西 (23)	滋賀	6	四国 (10)	愛媛	3
	岩手	1		石川	3		京都	5		香川	4
	秋田	3		福井	6		大阪	8		徳島	1
	山形	1					和歌山	2		高知	2
	新潟	3					兵庫	2			
	福島	1									
関東 (12)	群馬	2	中部 (20)	静岡	4	中国 (16)	岡山	3	九州 (15)	福岡	1
	茨城	2		愛知	4		山梨	2		大分	3
	千葉	2		長野	4		広島	2		長崎	4
	東京	3		岐阜	4		山口	2		熊本	2
	神奈川	1		岐阜	4		鳥取	2		宮崎	4
	山梨	2		三重	4		島根	7		鹿児島	1

31) 前掲『鄙廼一曲』p.151.

32) 栗田維良『弄鳩秘抄』1804~24年(前掲『近世童謡童遊集』所収,p.161).

33) 前掲『熱田手毬歌』p.238.

34) 浅野建二他監修『日本わらべ歌全集』柳原書店.

2. 詞句について

119例を冒頭部分の詞句に絞って一覧化を試み、集約を行うと、大よそ表2のような区分となった。履物の種類によって草履系と下駄系の二分がなった。そもそも子どもの履物の歴史は、素足 草履 下駄 靴と変化を遂げて今日に至るものの、これら詞句例採取の舞台となった時期（明治末～昭和中期）において、日常の用とした履物はおそらく下駄が草履であったろう。したがって、それらの品名をもって始まるのが順当と思われるのだが、この表はそうした傾向を示していない。

両区分にまたがって登場する“きんじょ”“きんぞ”等の詞句は明らかに古謡の名残りである。こうした単語レベルでの継承例はともかく、注目すべきことは全体として古謡の雰囲気や漂わす例が一部ではあるが、みられた。そこでそれらを、鎌倉の俗謡系と江戸の童謡系という視点から分類して表3にまとめてみた。

表2 冒頭の詞句

区 分	詞 句 例	例 数
草履系 (70)	草履かくし	45
	草履	10
	草履きんじょ	9
	じょう, じょ, ジャ等	4
	草履とり	2
下駄系 (31)	下駄かくし	30
	下駄きんぞ	1
その他 (18)	いっけんじょにけんじょ	2
	道の下の犬のくそ わしがちんたさよじょり買ってくれ じょっかけ ひめんじょ ばったれじょっ 雨か日和か牛か馬か いっぼかっぼ豆ざこよざこ 井戸の端に茶碗おいて カンカンかくれんぼ鬼せんぼ リンリン九つ八つ チュッ チュク ねずみの寄り合いは はりはりきんじょきんじょ 橋の下のねずみが ひとさら ふたさら みさら よさら 白豆 黒まめ すっぼんぼんにぬける ひしこ いわしこ はんまりげえファ 上見ろ 下見ろ 奥の隅コ テーレーレツボかさうり雀	(各1)

表3 古謡の継承例

種 別	詞 句	例数	採集地(県名)
鎌倉の 俗 謡	橋の下のしょうぶい せんだいどの 多度の 多度の	1	三重
江戸の 童 謡	ぞうりきんじょきんじょ おてんまてんま あしたの菖蒲は咲いたか咲かぬかまだ咲きそろわぬ みょうみょうぐるまを手にとてみれば	8	静岡(2), 秋田 神奈川, 千葉 山梨, 長野 京都 (各1)

119の詞句例を斬るキーワードとして、筆者は「橋の下の菖蒲」、「橋の下のねずみ」、「まな板」の3つを設定してみた。時代性や詞句の変化を見取る手掛かりとして有効な言葉と考えたのである。その3つを保持する例数を採集地を付してまとめたのが表4である。

表4 特徴的詞句による分類

詞 句	例 数	採 集 地 (県 名)
橋の下の菖蒲	7	秋田, 静岡, 長野, 三重, 大阪, 滋賀, 千葉
橋の下のねずみ	30	福井(5), 新潟(3), 滋賀(3), 大阪(2) 島根(2), 香川(2), 岡山(2), 愛知 三重, 和歌山, 兵庫, 広島, 鳥取, 徳島, 高知, 大分, 宮崎, 京都 (各1)
下駄かくし+まな板	8	山形, 京都, 福井, 石川, 富山, 岡山, 島根, 香川
草履かくし+まな板	5	静岡, 京都, 大阪, 香川, 愛媛

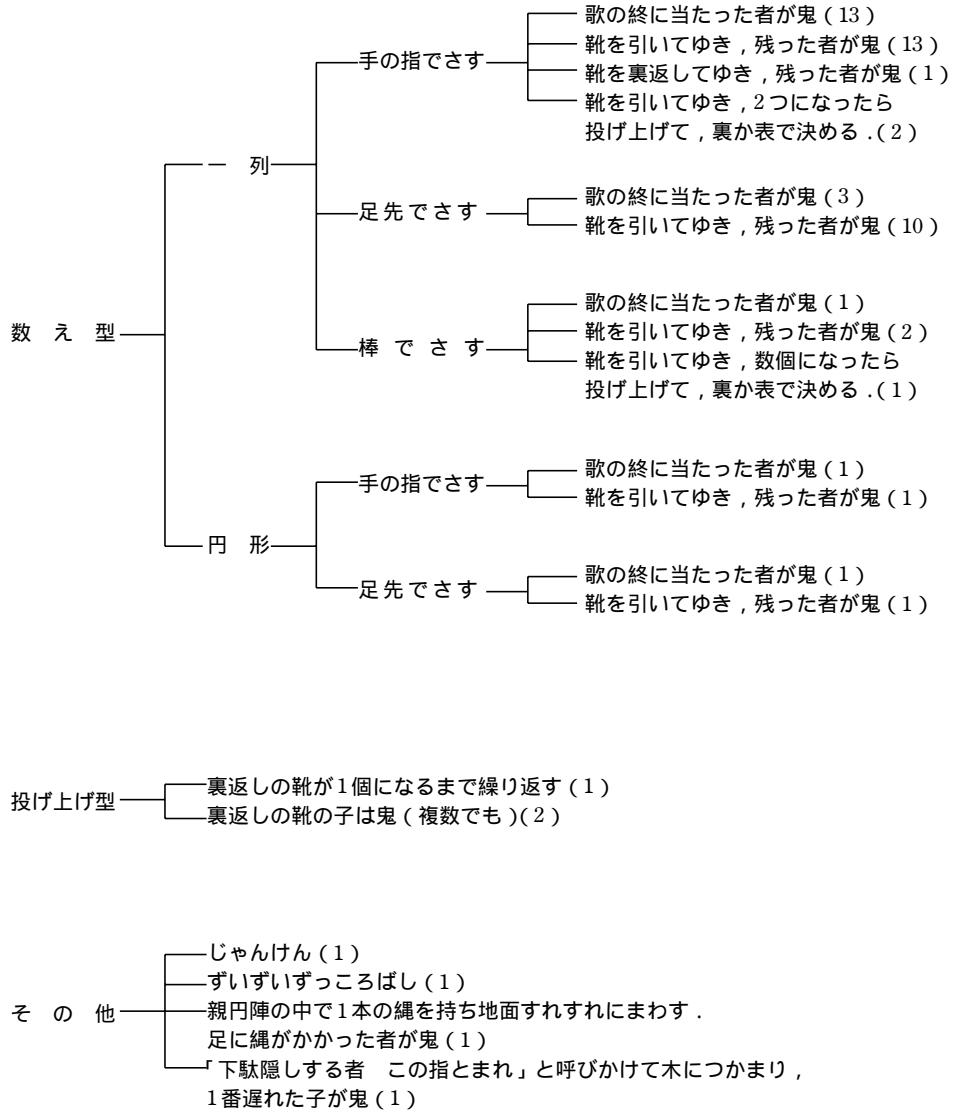
3. 遊び方について

この遊びにおける隠し鬼のルールについて紹介すれば、子がそれぞれ自分の履物を隠し、鬼が全員の履物を探し当てるといった遊び方が一般的であるが、少数例も含めて、鬼・子・親の関係からみた遊び型としては6通りみられた。このように遊びルールを役割関係から一覧化したものが表5である。次いで、この遊びに特徴的な草履を用いた鬼定めの方法を抽出し、体系化したものが図3である。大よそ数え型、投げ上げ型、その他と3区分され、それぞれが法則に則って整然と枝葉を広げている様子が明らかになる。

表5 隠し鬼の遊び型

型	履物を隠す者	隠される履物の持ち主	履物を探す者
1	子	子	鬼
2	子	鬼	鬼
3	鬼	子	子
4	鬼	鬼	子
5	親	投げて下向きになった者	投げて下向きになった者
6	投げて上向きになった者	投げて下向きになった者	投げて下向きになった者

図3 「草履隠し」の鬼定めめの体系図



()内は事例数を示す

「草履隠し」の考察

1. 遊びの構造図

これまで検討してきた巨視的な「草履隠し」考を踏まえ、ここでは遊びを真正面から見据えて、その本質ないし特質に迫ってみたいと思う。考究に先立ち、実際には総合的な活動として展開されるこの遊びを、構造的に把えて図示を試みた。詞句、旋律、動作、ルールの4要素を抽出して縦軸にとり、遊びの流れを4場面構成と把えて横軸にとり、それぞれの内容を文字と音符で表現したものである。こうして作成された「草履隠し」(図4)の一つの手掛かりとしながら、考察を進めてゆきたい。なおここで扱った事例は小泉氏の調査を基にしたものである。

図4 「草履(下駄)かくし」の構造図

場面要素	1	2	3	4
詞句		「下駄かくし(A)」 下駄かくし つれんぼ 橋の下のねずみが 草履をくわえて チュッチュク チュ チュッチュク まんじゅうはだれが食た だれも 食わないわしが食た 橋の下の 3軒目 「下駄かくし(B)」 下駄かくし まないた まないたの上で けんかが始まった	親と子：「まあだだよ」 鬼：「もういいかい」 1~10の数唱	親と子：囃子詞 鬼：「見つけた」
旋律	なし	「下駄かくし(A)」  (以下略) 「下駄かくし(B)」 	なし	なし
動作	全員が履物を片方ずつ出し、一列に並べ傍に立つ	親：履物の列に直面して立ち、指差していく 子：履物の列に直面して立ち、親の指先を見守る	親・子：駆け足で散り、片方の履物を隠して、ケンケンでもどる 鬼：目を閉じて立ち止まって居る	親・子：ケンケンで鬼の動きを見守る 鬼：目を開け、探しまわる
ルール	履物を片方脱いで出す	親：詞句の音に対応させながら、履物を順にさしていく 子：詞句を唱和しながら、親の指先を見守る 鬼決め	親・子：自分の片方の履物を隠す 鬼：目を閉じて数を唱える	親・子：鬼が探すのを囃子ながら見守る 鬼：履物を探し出す 鬼交替
小道具	履物	履物	履物	履物

2. 詞句について

固有の遊び歌に複数の詞句が付くことは、伝承遊びにみられる特徴の一つとして、これまでも再三触れてきた。しかし、長期にわたる継承の過程を経て今日に至るものは、ある程度洗練された定型に落ち着いているのも通例で「かごめ」や「はないちもんめ」等、細部に入れば差異はあるものの一つの歌として収束化がみられた。

今回の「草履隠し」歌の場合、そうした収束化が成されておらず、多種多様な形がそのままに多数残されていた。構造図で取り上げた詞句も、一つにまとめられず、あえて二つを併記したのである。ここで改めて再掲すれば、一つは「下駄かくし(A)」で、

下駄かくしつれんぼ 橋の下のねずみが草履をくわえて チュッチュクチュ
 チュッチュクまんじゅうはだれが食うた
 だれも食わないわしが食うた 橋の下の3軒目

であり、その二つは「下駄かくし(B)」で、

下駄かくしまないた まないたの上でけんかが始まった

である。これまでの検討結果を踏まえれば、前者は、鎌倉時代の俗謡を基に、江戸中期に改変をみた「橋の下の菖蒲」を基本的には受け継ぐものであろう。章にて指摘したように、“橋の下の菖蒲、刈れども刈られず”という大人の童謡^{わざうた}を、子どもの童謡^{どうよう}“さいたかさかぬか”に置換したと同様、いつの時点でか、“菖蒲”が“ねずみ”に取り換わったのであろう。この時期を、筆者は大正末から昭和の初期ではないかと考える。前例と同じく、新しい語句“ねずみ”が登場した結果、後続の詞句もそれにふさわしいものが導かれたのである。さて、何故“ねずみ”か。断定はできないが、同じ仲間の遊びとして普及していた「ずいずいずいっころばし」に出てくる“ねずみ”の影響か、もしくはそれとの混同ということもあろう。それにしても、“橋の下”という語は息長い言葉である。

後者の“下駄かくしまないた”について。「草履隠し」が実質的に「下駄隠し」となっても、当座は「草履かくしつれんぼ」のままであって、しばらくして「下駄かくしつれんぼ」と代わり、さらに時を経てこの詞句が現われた。「下駄」から“俎板”へのあっぱれな連想は、筆者のみならず多くの子どもらの共感を誘ったのであろう、時をかけて唱句として定着をみたのである。「草履隠し」のままであったら永久に出現し得ない詞句が、履物の移り変わりの途上に、誕生した例である。このように眺めてくれば、異次元の詞句内容のように見える二者が、その根において通じ合っていることが鮮明になってくる。

3. 旋律について

歌唱的なメロディーというよりは素朴かつ単調な唱え言葉に付く抑揚・節に近いものであって、そのためか印象も薄く記憶に残りにくいように思う。

(A)と(B)を比べれば、初めの4小節は、詞句を違えるものの旋律は同じである。それ以降は、詞

句の違いに対して、音の高低、長短の面で異なった展開をみせ味わいを変えている。

4. 動作について

この遊びの特徴的動作といえば、場面2の履物を指差してゆくところと、場面4のケンケン動作の子どもたちが靴を探し尋ねる鬼の動静を見守るところとであろうか。双方ともリズムカルな動きとして印象に残る。

5. ルールについて

一見したところ規則的には単純な遊びで、したがって遊びのルールも単一化しているかのように見えるが、実際に調べてみると実に20種近くもの遊び方が抽出された。その分岐点には、直線と円形、裏と表、手と足、初めと終わり、往きと戻り、両足と片足、出すと引く、投げると置く等対称的な行動概念が潤沢に位置づいており、これらが多様なルール創出の原点を成していた。多種類にもかかわらず、全体として秩序だったルール体系をもつ遊びとして一覧化が可能であったのはそのためであろう。

結びに代えて

予想を越えて長い歴史を保持していた「草履隠し」は、ここにきていよいよ消えなんとしている。履物を用いるという遊びは、素足に代わって登場した藁草履時代に産声を上げ、その後、下駄・ゴムやビニールの草履・運動靴の時代をと見事に成長し続けてきたが、近年の、マジックテープ付き、紐付き靴といった子どもの足先に一層フィットした、又、便利さが考慮された新商品の開発と普及化が、足から外して初めて遊びの素材となるこのルールには難敵となって、そのためにこうしたあそびが遠のくという結末をもたらした。果たして子どもたちの履物はこのまま進み、「草履隠し」は「下駄隠し」、「靴隠し」とともに抹消されてしまうのだろうか。

ところで学生達に広く履物遊びの思い出を語ってもらったところ、「靴隠し」という遊びに名を借りたいじめ、又、靴紐を結び合っただの恋占い、又、靴を汚して母親に叱られたこと、靴投げの禁止令が幼稚園で出されたこと等、靴に纏わる新たな話題が噴出した。こうした事例から、遊びは自然に消滅するのではなく力づくで消滅にむかわされているのだ、あるいは又、遊びの消滅ではなく現代にマッチした命の存らえを図っているのだと解するべきか。それにしても、陰湿な遊びの世界の一角が百人余りの学生達の記憶からも伺えた。こうした負の部分も含めて、現代に生きる子ども達の遊びの現実を大人たちは直視せねばならないと改めて思う。

翻って、草履で鼻をかむなぞというナンセンスなユーモアを発揮し、下駄から俎板を連想したかつての子どもたちにあった子どもらしさに溢れたエネルギーの発露はどこへ行ったのだろうか。今更ながらに、子どもの遊びは危急存亡に対峙しているのだということ、そしてそうした有様に、我々大人たちが保育者も含めて意識的に又無意識のうちにいかに深くかかわっているかということ、を、「草履隠し」の変遷についての考察を通して思いを強くした。